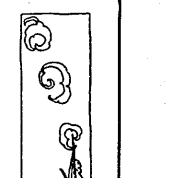

産業道（下）

岡部鐵工所　岡部繁

○産業道と法規

産業道の確立が、天業翼賛の一部門の確立であり、天壌無窮の皇運扶翼の天命である事は、各自各部の天命遂行に正しき認識を把握し、常に反省を怠らない事である。

共反省は、與へられたる立場を悪用する事なく、利己的、自由主義的、權利義務主義的觀念を超越し得る處に、今日の尊き自己を發見し得ると思ふ。

産業の發展に伴ひ、對立抗爭的氣運が隨處に發見され、其結果として組合組織、團體組織等により個人的力の不足は集團の力によって、自己の利益を獲得擁護せんとして、血みどろの戰ひをなしつゝある、醜き場面は、全く日本の姿とは思へぬものを今日迄あまりに多く見せつけられた。

權力あるものは權力により、金力あるものは金力により、個人的力の足らざるものは、集團の力によって、各自の立場のみを守らんと、合法と云ふ學問的美名の下に抗爭し續けて來て居る。

對立抗爭の國内に平和のあるべき筈はない、其結果として、其爭ひを表面的に糊塗せんとするのが、今日の法規の裏にも感ぜらるゝ、如何となれば、法規が天壌無窮の國民道確立の爲、天業翼賛の爲であるならば、何としても、國體に即したる、魂の打ち込まれたる、國民指導、羅針盤でなくてはならぬ。然るに、法規は倒するものなりとの觀念の下に、指導を忘れて摘發の具に供され、甚しきに至りては、千差萬別の業態を最悪、最等を標準として、其の精神を活かさんと立法されたる法文を、千變一律に死文として、文字の單なる意義に拘泥して、悪用さるゝ事さへある事は、國民道破壊の一因とも考へ得ると思ふ。

斯くの如き場合に、更に最も起り易き現象は、運用者が、法規を自己の感情の儘に解釋運用し、折角の天下の法規も、産業道確立の羅針盤も、一官吏の私のものとして悪用され、正しき道を阻止する事は、此法規「道しるべ」により、右すべきを左に、左すべきを右に墮落せしめつゝある事さへある。

黄しきに至りては、同じ法規「道しるべ」の中に、甲のものを乙のものによって破壊し、道を求むるものは正しき道を失ひ、右往左往の結果は法規に魅るゝものとして、割せらる事さへあるを考へたい。

これは、單に産業界のみに止まらず、國家全體に於て考慮する必要がある。

更に同じ官廳内にあって、正しき國策を遂行すべき天命を課せられながら、法規の爲、又は統制と稱するもの、爲に、なし得る力も出する能はず、出來る仕事も其儘となし、道は求められず、有爲の士を無能の士となし、悄々として天を仰ぎて、慨嘆久しくさせることさへある。

單なる學問と云ふ素養が、天業扶翼の實生活に、直ちに活用し得ると思ふ處に誤りがある。故に實力あるもの、道を求むるもの、天命の尊さを知るものが、却て道なきもの、實力なきものに阻止されて行きつゝある事は何としても、官吏道の行詰りであり、頽廢である。

而かも官吏は、國民の指導者であり、協力者であり、複雜者である筈である。それが、單なる理論により、精神なき文章の法規によって、複雜極まりなき産業各部門を、一律に監督せんとする、叱かつり付けて動かさんとする、己れの言ふ事を聞かなければ、形の變へられたる方法によって、所謂「江戸の仇を長崎で討つ」の譬へを共儘實行するが故に、心あるものは馬鹿々々しいけれ共、仕方がないと、正しき道を捨てゝ、道徳順應これ努めて居る事は、三人五人の會合毎に聞く、嘆息の言葉である。産業道の確立が、道義日本の姿であるならば、其指導者たるべき官吏は先づ一人も殘らず眞の日本の姿により、法規を運用し複雜し、協力すべきであると思ふ。

これが眞の官吏道の確立であり國民道樹立の根幹をなすものと思ふ。

此非常時を打開するとかから、戰後の重大難關を突破するとから、先づ官僚民共卑の弊風を打破し、單なる學問によって、人材を求むる愚をなさず、眞に道に立って、天業扶翼の熱誠と修練されたる人格を有するものは、立場の如何に關らず、ドシ〳〵拔擢登用して、天命を遂行せしむる、日本人的斷行があらねば、此難關は打開し得ぬと思ふ。

實行なき學問、實踐化し得ぬ理論と云ふものが、眞に皇道光被を成す力ありとするならば、今日の行き詰り、今日の非常時はない筈である。

西洋の唯物的、個人主義的、觀念の下に於ける學問、法規は今となっては、一々國體破壊の具に供されて居った事を考へ得る。

又統制だ、統計だ、法規だ、と云ふ、學問的理論的のものによって、机上の論のみに汲々として居るものが、自己の主張又は考の通りに成らざる時は、其考に合致せしむべく無理な工作をする、甚しきに至っては、何人は不都合守って記事を書いて何になる、日本民族それ自體がすでに今度の事變で生れ變りつゝあるのだ、日本民族がとにかく包頭の土を踏み、太原の雪を蹴つた。この動かすことの出來ぬ現實の事實がこれらの兵士の家族に、郷土の人々に、更にその子孫に、どんな大きな感銘を與へようとしてゐるのだらうか。

すべての日本人的偏狹は急角度に大旋回しようとしてゐるのだ、大陸に滿洲への移民すら二の足を踏み勝ちだった日本人が、これからはきつと氣輕な氣持でどん〳〵大陸に渡ってゆくだらう。

……

八月の末八達嶺を越すと北の山稜線のかなたを見て

張家口にゆきたいね、あすこで會へる身になりたい。

と語り合ったその寄野部隊長がそれから二ケ月半の後、包頭に納ってゐるのに會ったときの驚喜の心を書いておきたい。部隊長は包頭でまたいった。

『オイ君、あの張家口で會ひたいといひ會ったあのだが見ろ！とうの昔に張家口を通り越して包頭で會ったね、夢は實現したのだ、まだ〳〵僕の夢はさらに飛んでゐるぞ……』

この大同、包頭といって大陸全體から見ればほんの入口に過ぎないのだ、こんな玄關口で悲鳴をあげてどうなる！私は日本民族がこれから歩んで行く道の彼方にしみ〴〵とした感傷に近い感動にひたったのであった。

だと云ひながら、一回の觀察もせず、空中樓閣的のものによってこれを事實たらしむる不合理さへある。

各種各樣の産業を、天業翼賛の

道に確立せしむる事は、先づ指導者たるべき官吏の道が内容的に確立すべきであると思ふ。共官吏道の確立の時が、法規は道の光となり、監督は指導となり、相談相手となり、鞭撻は無用の長物となり、官廳は國民指導中心機關となり、眞の日本の姿は現はれ、産業道の確立は勿論、國民全體が天業扶翼の大旗の下に營々として獻身的努力をなし、玆に神武天皇詔勅及明治天皇勅語の御聖旨に應へ奉る事が出來ると思ふ。

○産業道と原料統制

國家の産業は、あらゆる部門によって構成され、それが、天業翼賛の大道に即し得る處に無理なき統制も出來得ると思ふ。

今日色々の部門に於て統制なる言葉を聞く、而し、其統制が、生産、配給、統制等種々なる研究は遂げられて居るけれ共、これを國家的に考ふる時、其統制が天業を翼賛せんとする、産業道に即したものとは、考へられない事があまりに多い。

自己利益擁護の統制、人的複雜化を除く統制、價格の高低を人爲的になす統制、事業を獨占化せんとする統制事業を漸次大資本の中に收めんとする統制等々が今日の統制の實體である。

元來、産業道、經濟道が確立して居るならば、今日の如き統制は必要ないと思ふ。眞の統制は、國家の統制下にあって、國民皆眞統制によって從ひ得る時のみ、公正なるものは得られるのである。

鐵、鋼、銑鐵等の基礎的材料が限られた特種の人により、所謂統制され、缺損を生ずる時は、國家の保護を受けて今日の組織となり、其結果として製品化せんとする、幾多の業者の不便は正に言語に絶し、何處に産業の道あるやと、長嘆久しきものがある。理屈は、如何様にもつくであらう。

今日の統制は、獨占的、自己擁護のものの多い事丈けは、何としても否む事は出來ない事實である。

國民各部門の者が、多少に拘らず、天業翼賛の聖業に努力しつゝある此非實は、國家産業の如何なる部門と雖も、道に即し、團體に即したものであらねばならぬ。

今例を共販組合の所謂販賣統制に取れば、製造家より指定商に、指定商より問屋へ、問屋より一般消費者へと云ふ組み合せであるが、此指定商なるものは、實は製造家である、又指定商なるものは他に色々の事業經營をなし居るものであるが故に、此指定商に限り、直接自己の事業には材料供給をなすの第一特權を持つてゐる、共餘りものを聯入在庫する事が一般の問屋筋なるが故に、問屋筋例では、思ふ様に材料の入手出來ず、從つて賣をしみ、買付け等人爲的價格の高下をなし、一般需用家の手に入るときは、非常な高値のものとなり、此需給關係が、一日の間に相當の値開きを生じ、此非常時下に於て材料不足の爲中小業者は仕事を持ちながら職工を働かす事が出來なくして、悲憤慷慨して居るものが幾百千人あるかを考へねばならぬ。

而して此統制の組織下にあるものは、事業は益々損大され、更に多年育て上げたる職工が、大工場目指して渡り行く有様は、全く日本の姿とは思へないものがある。

更に大資本により、中小の事業が次から次と併合され、漸次片寄り行く姿は、均衡を失ひ、何時の時代か失墜破壊の時期が、到來せぬかを心から憂ふるのである。

これ、道を外れ、中心を失った處に當然起るべき現象である。

翼道は、行詰りと破滅がある。皇道日本の姿こそ、行詰りもなければ、破滅もない。

即ち國民全體が、眞に國に殉ずるの意氣によって、各部門を遂行する、此尊き精神的結合こそ、如何なる難關をも突破し得るのである。

事業に大小はあっても、小を集むれば大となる、小なりと雖も精神力の横溢せるものは、精神力なき形の大なるものより、遙かに大なる御奉公を捧げ得る。

此意味に於ても、産業界に於ける基礎的材料、大小如何に拘らず、各部門に公正に配給さるべきである。共配給された材料が、護國の製品と化し、各部門を護る處に眞の強さも道もあると思ふ。

産業道の確立は、一工場でなく、全國の工場、特に基礎的材料の統制が道義化される時に、眞の樹立はある。

斯くしてこそ、皇道光被の中に國民道も産業も、自ら培養、育くまれて行くのである。

○産業道と職工爭奪

國を護り得る産業は、道義化された工場より起る。

如何なる事業も道義化されずしては、眞の平和と進展を求むる事は出來ない。

經營者と從業者が天業翼賛の天命を遂行する爲めに、國に殉ずるの赤誠は、直ちに人の眞の結合であり、産業和平の根本である。

一方的のものでは、百年河清を待つ如きものにて、眞の姿は現はれない。

今日職工不足は、各地に叫ばれて居るが、共眞相を靜かに考へると、甲の工場より乙の工場へ、乙より丙へと渡り行くものゝあまり多い事である。此の點は渡りあるく職工よりも、共の責、工場責任者にあると思ふ。

甲の工場の擴張は、乙の工場の縮小となって居る現實の問題を思ひ合せて行く時に、經營者の間に道なき現はれにはあるまいか。

經營者の間にさへ道なきものに、一般從業員に道を求むる事は無理であり、更に道なきものを多くつくって行く事である。

斯くの如き經營は、天業翼賛の資格のないばかりでなく、正しき經營者を苦しめるものであり、皇道産業の破壊である。

吾人は職工爭奪のある間は、産業道の確立は出來ないと思ふ。此處に勞働組合も必要となるであらう、雇傭制度義務的相對的約束も必要となるであらう。二重三重の法規も無駄ではない事になるであらう。

人間を機械的に考へ、唯物的、自由主義的觀念による對立抗爭は激化されて行くであらう。

故に經營者たるもの、自省すると同時に、職工を見るに眞に親の心を以てなし、親子の眞情結合によって、天業翼賛の實を擧げ、以て大御心に添ひ奉り度いものである。

○結論

八紘一宇の大理想も、先づ各人が正しく本日を反省する事である。即ち自己の家庭、工場は道に即して努力を捧げつゝあるやを、猛省する事にある。

玆に國民道の樹立があると同時に、各部門の道義化があると思ふ。

即ち國家各部門の道義化、それが、皇運扶翼の根源であり、國民道の確立であり、産業道の確立である。

道は全體によって全きを得る、片寄りたる處に道は生じない。産業道の確立も亦國民的反省と、實踐躬行、言行一致の中にのみ培養完成されるものである。（完）